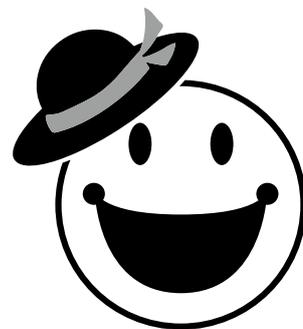


「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに

挑戦しよう！

養正館館長・渡辺貴斗



第6回

## やる気を出す（その3）

### 空手を辞めさせる！？

#### ◆今度審査に落ちたら空手を辞めさせるぞ！

「ここを直せば、審査に受かるよ」と稽古中に、小1の男の子に声を掛けたところ、「今度審査に落ちたら空手辞めさせるんだって」と笑顔で答えてきました。「誰がそんなこと言ったの？」と聞くと「お父さん！」。それを聞いていた他の子ども達が「私も辞めさせられるよ」、「僕も、僕も！」と同じことを言ってきました。でもなぜか、辞めさせられるはずなのに、みんな、ニコニコで悲壮感がありません。この子たちは、落ちることに慣れてしまっているのでしょうか？ 親としては、「辞めさせる！」、と言えは焦って頑張るはずだ」という軽い気持ちからでしょうが、「うまくできなかつたら辞めさせる」というのは、「脅し」ですから、やる気にはつながらないのです。

さらに問題なのは、大人が嘘をついている点です。「できなかつたら辞めさせる」と言って、本当に辞めさせた親を今までに見たことがありません。落ちてしまったら、「まあ、次は頑張れよ！」で終わりです。「なあ〜んだ、辞めなくていいんだ」と、大人の嘘に慣れ、「辞めさせるぞ！」といくら脅しても「そう言って、また辞めさせないんでしょ」と、子どもは、大人がコントロールしようとしている意図を見抜きます。最後には、思い通りに動かない、やる気の無い我が子を目の前に、大人達は途方に暮れることとなります。

#### ◆“自分からやりたくて”仕方がなくなる声掛け

それでは、どのような声掛けが良いのでしょうか？ それは、「こうすれば良くなるね」「こうやれば成功するぞ」といった肯定的なゴールを示すことです。「こうなったらお母さんは嬉しいな」とこちらの気持ちを伝えるのも効果的です。私は

稽古の初めに、「黒帯合格したら、帯の刺繍は何て入れる？」なんて聞きます。「先生みたいに苗字だけにする！」とか「銀色の糸にする！」と子供達の眼はキラキラして楽しそうです。頭の中では、自分が黒帯を締めている姿を想像しているのでしょう。そんな話をしてから稽古に入ると、皆、真剣な表情で稽古します。やらされているのではなく、脅されているのではなく、“自分からやりたくて”仕方がなく頑張ってしまうのです。

#### ◆親が本気で辞めさせようとしているとき

試合デビュー戦の子が一回戦であっけなく負けてしまい、翌日、「向いていないので辞めさせます」と言ってきたお母さんが今までに何人かいました。このパターンは、先ほどの例と違い、親が一番ショックを受け、本気で「辞めさせる気」でいるということです。そのうち何人かが本当に辞めていきました。試合に出る前は我が子に期待し、親も勝つ気満々です。我が子への期待感の強さと、容易に敗退したこととのギャップに、子どもではなく、親が精神的に堪えられなかったのです。

このようなときこそ、親御さんには、我が子を入門させたときの気持ちを思い出して欲しいと思います。

空手を始めた本当の目的は何だったのでしょうか？ 初めで道場に来たときは、誰もが「礼儀・しつけを身につけて欲しい」、「イジメを寄せつけない、心の強さを身につけて欲しい」、「あいさつ・返事をハキハキ言えるようになって欲しい」など、精神面での強さを身につけて欲しくて空手を選んだのではないのでしょうか？ 初めから「全少で日本一になりたい」と思って始める親はいません。初めは、空手のこともよく知りませんし、全少の存在すら知りません。それがいつからか、「全少で、〇〇ちゃんに負けちゃうよ！」とか、「これじゃあ、

今年は全少に行けないよ」と勝利至上主義に変わってしまうのです。

### ◆目的がいつの間にかすり替わっていませんか？

試合に出るので「勝利」にこだわるのは当然ですが、目的と手段が入れ替わってしまっていることに気づいていないのです。お母さんは初め、「立派な人間になって欲しい」という目的を遂行するために、「空手という手段」を使おうと思いつき、武道である空手を選んだはずですが。しかも、試合に負けたとき、親も子ども心が成長する絶好のチャンスなのに、それに真っ向から向かい合わず、「向いていないから」と他の習い事に親が逃げてしまうのです。他の習い事に行った子がその後どうなったか道場にいる同級生の子たちに聞くと、たいていは、「〇〇くん、あのあと、すぐ野球辞めたみたいです」と答えます。“向いていないから”という理由で転々としていては何も大成しません。確かにいろいろな習い事を試して自分に合うものを探してあげるといのは間違っていないのかもしれませんが、努力をさせる前に“向いていないから”と親が勝手に判断するというのは、あまりにも短絡的です。

### ◆親は勝敗に動じず「で～ん」と構える

小2、小4の優勝をはじめ、全少で常に上位入賞している

江藤凧沙（小4・養正館）は、毎日帰宅してからすぐに宿題、夕食後の19時～21時に「日本一になる形メニュー」をこなし、自分で決めた練習を消化するそうです。以前、「何でそんなに練習するの？」と聞いたら、「だって、自分で決めたことをやるとどうしても2時間かかるから」と答えていました。“努力の天才”である「江藤凧沙」でさえ、これだけ毎日努力しても日本一になるのは至難の業です。特に努力もせず、まだ何も始まっていないのに「向いていない」も何もありません。

試合で負けたとき、特に親が落ち込んではいけません。子どもはオロオロする親の姿を見て「僕の所為（せい）で、お母さんが大変なことになった！」とプレッシャーを感じ、罪悪感を感じながら空手を続けることとなります。親は勝敗に動じず「で～ん」と構えていなくてはなりません。「空手という手段」を使って、「子どもも成長することが目的」であることを、初心を省みて再認識していけたらと思います。

#### PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から厳しく空手の手ほどきを受ける。先代が病氣となったことから一大決心をして、養正館を継ぐ。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2014年、2015年と2年連続で全少7名入賞させる。道場経営でも、一道場で300名を超える大躍進。

日本空手道鴻志会空手道場養正館／静岡県沼津市本町 11-12



## Column

### 養正館の2015全少結果

今年の全少ですが、昨年と同数の「養正館・7名入賞」を果たすことができました。私自身、今年から本稿の連載を始めていたこともあって、少々プレッシャーを感じましたが、選手の皆がよく頑張ってくれました。特に、私が感じるプレッシャーを選手に感じさせないよう、選手がのびのび楽しく稽古できるよう配慮しました。4年女子形決勝では、養正館の同門対決で優勝と準優勝を競うという、夢のようなカードもありました。昨年準優勝だった3人、倉岡穂乃花（準優勝）、望月結以（3位）、熊谷駿（5位）も安定して今年も入賞できホッとしました。組手入賞数を形と同じくらいに、伸ばすことが当面の目標です。

入賞できなかった選手も、毎日の空手ノートに、次の目標を力強く書いてきてくれました。試合があった日も、「返事・挨拶・靴並べ・姿勢・お手伝い」を自己分析し、いつもと変わらないノートでした。

また、今年の全少で、静岡県は女子形総合成績で大阪、埼玉

などを抑え都道府県別総合1位となりました。実は、養正館の女子形入賞者だけで全国1位の点数を稼いでおり、一道場での得点としては記録的な結果を残せました。



今年の全少で養正館から7名が入賞。4年女子形優勝・江藤凧沙（上段右）、同準優勝・倉岡穂乃花（上段左）、1年女子形準優勝・勝又蒼唯（下段中央左）、6年男子形3位・勝又颯太（上段中央）、2年女子形3位・望月結以（下段左）、3年男子形5位・熊谷駿（下段中央右）、1年男子組手5位・芹澤連二（下段右）。